



Data 2022-45

監督：チャン・シイエン
 出演：ジェット・リー／ユエ・ハイ
 ／フー・チェンチャン／チャ
 ン・チェンフー／ティン・ナ
 ン／ワン・クァンチュアン／
 テー・チュアンホア／ユイ・
 チェンホイ

👁️👁️ みどころ

今から40年前の1982年、私の独立後3年、日本はバブル直前で元気がいっぱいだった。香港もブルース・リーやジャッキー・チェンに続いて、本作でジェット・リーが登場し、香港武術アクション映画の黄金期を築いていた。“雨傘運動”がポシャリ、“一国二制度”が有名無実化した今の香港と大違いだ。

本作の時代設定は清ではなく、隋王朝の581～618年。あくまで“専守防衛”を標榜しながら武術の鍛錬に励む少林寺の僧侶たちに救われた主人公は、いかに成長していくの？

他方、プーチン大統領を彷彿させる横暴な群雄の一人、ワン將軍の野望は如何に？その横暴には屈するしかないの？いやいや、現在のウクライナ情勢と対比しながら、“最後の戦い”のあり方と少林寺の勝利をしっかりと見届けたい。



40年前、即1982年、也是我事业独立的3年后，日本正处于如火如荼的泡沫经济之前。此时，香港也筑建了武术动作片的黄金时代。继李小龙和成龙之后，李连杰以这部影片开始登场。那时的香港与今天的截然不同。今天的香港，“雨伞运动”已经泡汤，“一国两制”已经有名无实。

这部电影设定的时代背景不是清朝，而是581～617年间的隋王朝。被宣扬“专守防卫”、“精练武术强身健体的少林僧人救下的主人公，会如何成长呢？

另外，作为像普京总统这样横暴群雄中的一员，王将军的野心是什么呢？除了屈服于他的蛮横之外就别无选择吗？不，不，对比现在的乌克兰情势，一定要好好看看“最后之战”的进展，以及少林寺的胜利。



■□■40年前の香港映画はホンモノ揃い！迫力満点！■□■

2022年の今、岸田文雄総理は「新しい資本主義」を標榜しているが、平成の“失われた30年間”からの脱却は容易にできず、日本の“国力”は衰えていくばかりだ。バブル期に入り、それが弾けてしまった1980年代の“元気だった日本”が懐かしいような、反省すべきような・・・。

そのように、日本も1982年から2022年までの40年間で大きく変わったが、それ以上に激変したのが、香港。1997年の中国への返還以降は、「一国二制度」の下、超高層ビルが隣立するあんな小さな面積で、国際金融都市としての大きな役割を果たしてきたのはお見事！そんな中で“民主化”の動きが出てきたのはある意味当然だが、“雨傘運動”と呼ばれたそれが挫折してしまったのは周知の通りだ。そんな状況下『バーニング・ダウン 爆発都市』（20年）のような興味深い映画も登場したが、近時の香港映画が全体的に元気をなくしているのはやむを得ない。

それに対して、1980年頃の香港映画は、①ブルース・リー、②ジャッキー・チェンに続いて、③本作のジェット・リー（当時はリー・リンチェイ）の登場によって、次々とホンモノの武術アクション映画が登場！とりわけ、ブルース・リーの登場は、分野こそ違え、『エデンの東』におけるジェームス・ディーンの登場と同じ、いや、それ以上の衝撃だった。そして、中国全国武術総合大会で最年少の優勝を飾り、その後合わせて5度のチャンピオンに輝いた19歳のジェット・リー（当時はリー・リンチェイ）が、本作で初主演したのも、それと同じレベルの衝撃だった。

もともと、私はリアルタイムにそれらの香港武術アクション映画を見ておらず、もっぱらTVで①ブルース・リーの『ドラゴンへの道』（72年）、『燃えよドラゴン』（73年）や『死亡遊戯』（78年）、②ジャッキー・チェンの『少林寺木人拳』（76年）や『ドラゴンモンキー 酔拳』（78年）、③ジェット・リーの『少林寺2』（84年）等々を楽しんでいただけだ。そんな私だから、「リアル・アクション映画」最高峰、スクリーン大復活。」と聞けば、こりや必見！

■□■時代設定は隋王朝！アレシ、清王朝ではないの？■□■

ブルース・リーの登場によって武術アクションが香港映画の代表的なジャンル映画として世界的に有名となり、続いてジャッキー・チェンの登場でコミカル・クンフーが流行する中、本物の中国武術を取り入れたアクション映画ができないかと企画されたのが本作。1982年1月の春節に中国で公開された本作は大ヒット。“武術アクション映画の金字塔”となった。日本では同年1月に公開されたが、公開されるや年間興行収入第6位となる大ヒットとなり、日本におけるアジア映画の興行収入記録として、2003年公開の『英雄/HERO』（『シネマ5』134頁）まで21年間破られなかったようだ。

本作は4K リマスター版であるにもかかわらず、新たに大型のパンフレットが作られ、そこには古い資料もたっぷり、詳しい資料もたっぷり載せられている。そのコラムの1つ、

宇田川幸洋氏（映画評論家）の「40年の時を経た今、映画『少林寺』から感じるいくつかのこと」を読むと、「少林寺ものほとんどが清王朝のはなしであることに気づいた」とある。たしかに私もそう思っていた。しかし、本作の時代設定はそうではなく、隋王朝の581年から618年の37年間だ。そして本作の主演は、ジェット・リー扮するシャオフー（小虎）とタン師父（曇宗師父）（ユエ・ハイ）をはじめとする若き13人の僧侶たちだが、それに加えて重要な役割として登場するのが、唐の大都督、リー將軍（李世民）（ワン・クァンチュアン）とタン師父の娘パイ（白無瑕）（ティン・ラン）。えっ、少林寺はそんな昔の時代からあったの？中国の歴史を学び、かつ中国語の理解が深まってくると、本作のような中国（香港）映画はより興味深くなる。さあ、そんな時代設定の中、少林寺（の存亡）は？

■拳、槍、刀、棍、縄 etc. 中国武術の真髄をタップリと！■

本作の“悪役”は、唐の大都督、リー將軍から天下を取ろうと企てている、群雄の1人であるワン將軍（王仁則）（ユエ・チェンホイ）。本作冒頭、少林寺が河南省の高山にあることが紹介されるが、本格的ストーリーは、ワンに父親を殺されながらも、シャオフーが命からがら少林寺に逃げ込むところから始まる。

僧上のソンジ（僧値）（イェン・ディホア）は災いが降りかかることを恐れたが、管長（チャン・チェウエン）は「御仏のままに」と介抱の許可を出したため、シャオフーはタン師父たちの指導を受け、若き僧侶たちとの交流を深めることに。しかし、ワン將軍への復讐を誓っているうちは、シャオフーが僧侶になれないのは当然。すると、シャオフーは何のために少林寺で武術の鍛錬に励んでいるの？

そこら辺りが本作では少し不明確だが、他方、シャオフーとタン師父や仲間たちとの交流ぶりを見ていると、犬の肉を食ったり、酒を飲んだり、適当に羽目を外しているところが本作は面白い。さらには、師父の娘、パイとの恋物語（？）まで展開していくからサービス満点だ。そんな中でもシャオフーは僧侶となり、チェユアン（覺遠）という法名までもらい、武術の鍛錬に励んだが・・・。

■パイの危機は？リー將軍の危機は？チェユアンの危機は？■

ロシアのウクライナ侵攻から約2ヶ月が経ち“戦争”は新たな局面に入りつつある。そこで誰がどう見ても目立つのは、ロシア（プーチン大統領）の横暴さだ。それは40年前の本作でも同じで、パイがワン將軍の部下にさらわれる姿を見ていると、それはどう見ても横暴。“ある決意”で少林寺を抜け出したチェユアンが、そんなパイを見てパイを助けたのは当然。また、危機が迫った2人を助けてくれたのはワンの偵察をしていたリー將軍だったから、パイの説得で再び少林寺に戻ったチェユアンが、少林寺近くでワン將軍らに追われているリー將軍を救助したのは当然だ。

パイの力を借りてリー將軍を黄河まで逃がしたチェユアンだったが、ワン將軍の部下たちに取り囲まれてしまったから、さあ大変。そこに助けに来たタン師父たちが武器を持っ

て命がけでワン將軍の部隊と戦い、これを蹴散らしてくれたおかげで助かったが、ワン將軍の横暴に、ただ耐えるだけでいいの？反撃は不要なの？さらに、チュアンがワン將軍に追われているため、タン師父は彼に寺を去るように伝えたから、さあ、チュアンはそんな危機をどう切り抜けるの？

■□■少林寺の危機は？管長の死を乗り越えて、遂に対決！■□■

仏の道に尽くすはずの少林寺が、なぜ武術に励み、さまざまな武術を生み出しているの？それは、すべて自らの修行、鍛錬のためだが、管長の言葉によれば、少林寺武術はあくまで自衛のもので攻撃のためのものではないらしい。日本の憲法や世論が頑なに守る“専守防衛”の思想が隋の時代からあったことが、本作を観ているとよくわかる。

しかし、「リー將軍を差し出せ。拒否したら、少林寺を焼き払うぞ！」と脅されたら、管長はどうするの？織田信長は、強力な僧兵を擁して一大政治勢力になっていた比叡山を焼き払い、僧侶はもとより女・子供まで皆殺しにしたが、少林寺もそうになってしまうの？その段階でも管長は、「話せばわかる。私がすべての責任を取る」と言って、火あぶりの刑に処せられようとしたが、ワン將軍の横暴の前にそこまで屈服する必要があるの？

連日報道されているウクライナ情勢と対比しながら本作を観ているとそんな疑問が湧いてきたが、そこに馬に跨がり、武器を持って戦うべく駆けつけてきたのがタン師父たちだ。彼らの少林寺武術のレベルは高いが、所詮多勢に無勢。弓矢を使った反撃の前にタン師父も胸を射抜かれてしまったが、そこから起きる“大逆転劇”に注目！

安倍政権当時から議論されてきた「敵基地攻撃能力」は、一方ではその必要性が認識されながら、他方では一種の拒否反応も強かった。しかし、自民党の安全保障調査会（小野寺五典会長）は、4月21日の会合で、その名前を「反撃能力」へ改称したうえで保有するよう提唱した。名前を変えただけというのは一種のインチキかもしれないが、それでも私は机上の空論ではなく、本音の議論が進んでいくことを喜びたい。

少林寺における仏法の修業と武術の鍛錬が今日まで続いていることは歴史的な事実だから、この時のワン將軍の野望は儂く潰えたのだろう。本作ラストではそれをしっかり確認すると共に、ウクライナでも同様の結末になることを期待し、見守りたい。

2022（令和4）年4月21日記